



Title	協会誕生のころ：関教授から鶴崎府医務課長への手紙
Author(s)	
Citation	大阪公衆衛生. 1967, 19, p. 16-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

協 会 誕 生 の こ ろ

関教授から鶴崎府医務課長への手紙

大阪公衆衛生協会が誕生したのは、昭和31年の4月、もうひと昔前のことである。

現在、会員数400名を擁するこの協会も、決してスムーズに産声をあげたわけではない。先輩諸氏が燃えるような情熱で難関を打開したのだと聞いている。

今回、はからずも協会事務局のロッカーの底から1通の書簡が発見され、協会発足当時の事情が明らかになった。

この書簡は、現協会常務理事の阪大、関教授から、当時の府の鶴崎医務課長にあてたもので、協会誕生に活躍された諸氏のご苦労と情熱が、ヒシヒシと感じられる。

お名前のお出での方々にはご迷惑かと存じますが、あえて会員諸氏にご紹介する次第です。

消印は昭和30年の1月30日

鶴崎 学兄

関 生

1月30日

昨日は、めんどうな会を主催下さってお骨折感謝いたします。

予想していたとおり、前途多難ですが、

小生としては、ゆっくり、着実に打開、前進する決心を新しくしました。困難であるが、必ずやれるという感があります。というのは、われわれが着手し、構想している仕事は、今まで、どこでも企画されたことのない新しい線に沿ったものであるからです。全く異質なものといてもよいかも知れないと思います。

あれから、考え、考え、歩いて、大阪駅まで、浜口、阿形、両君と歩き、話して行って了解しましたが。現在のところ「公衆衛生の会」の解消、合同は、その組織の統合に影響するという効果から考えると、時期を得たものではない、それまでには、具体的ないくつかの段どりが必要で、それを経て、一つの気運が熟したときに、すすんで合一し、一気に多くの組織の再編を心がける方が効果的でしょう。

しかし、幹事会でも、一言だけ申したように、気運の熟成のために、実質的に活動するという点では決して犠牲を厭うものではありません。小生個人が、貴方よりの指示を得て接触する場合も、会としての活動の外に考えていきたいと思うのです。

今までの「会」と、「協会」とが、小生の考えでは二つのものではなく、大きな目的のために、一つの活動のために組織されたものと映じるのです。

言葉はたまりませんが「協会」は自分たちの組織であると、まず、幹事の方がそう考えるようになり、それが拡大していくようであればならない。

不十分な現状ではあるが、しかし、小生は活動を通じて、その方向へ行けると思うので、そのためのスタートを既に切ったものと考えております。

外国の公衆衛生を物の本でみると、行政と研究とが実によく協力していますね。わが国では今までそれが独善的であり、田舎くさかったと反省します。

小生は、不遜、自ら貴兄の相棒であることを志ざし、よき相棒を持ったことをよろこぶもので、即ち、それが「協会」を自分の会であると認め、新しいコースを構想する所以でもあるわけですが、昨日は近くまで参上するのだから、石橋さんやその他の方にもご挨拶しようかと思っていましたが、他のことの方が気になって失礼してしまいました。もっとももう少し仕事ですんでからの方がよいかも知れませんね。よい折があればご遠慮なくアドバイスして下さい。